

子ども発達教育研究部門

高大連携教育研究

米田 俊彦（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）

玉谷 直子（お茶の水女子大学人間発達教育研究センター）

お茶の水女子大学では、附属高校と大学の合計7年間の特別教育プログラムを設定し、附属高校 2005 年度入学者から実施している。高校教員と大学教員が協力して編成した「教養基礎」科目の履修（全生徒を対象）、希望者に対する「選択基礎」科目の履修、高大連携特別推薦入試を経て第1期生8名が2008年度に本学に入学した。

また、この特別教育プログラムに関連して、大学と附属高校の連携教育の取り組みとして、附属高校生対象のキャリア・ガイダンス、校長による進路相談、公開授業なども行われている。これらの成果についても本センターが調査を行っている。

この特別教育プログラムは大学による研究活動として実施され、人間発達教育研究センター附属学校部門がプログラムの諸側面について調査研究を行うことになっている。調査研究にあっているセンター員は米田俊彦（大学院人間文化創成科学研究科教授）・富士原紀絵（同准教授）・玉谷直子（本センター講師）・石井朋子（附属高等学校副校長）・荻原万紀子（附属高等学校教諭）・植田敦子（同前）・原野泉（同前）・溝口恵（同前）である。

今年度を実施した調査研究活動の概要は次の通りである。

【基礎調査】

高大連携プログラムの基礎調査として、高等学校各学年末に「学習に対する意欲・実態に関する調査」を実施している。調査内容は、毎日の学習内容、学習量、学習方法、生活、様々な事柄に対する意識、進路に関する希望など、多岐にわたっている。高大連携プログラム開始から4年目となった2008年度は、「学習に対する意欲・実態に関する調査」の調査項目の変更について検討を行ったが、これまで収集したデータを活用する際の整合性の問題等を考え、2008年度も従来通りの調査を行うこととなった。基礎調査の活用、項目の検討は今後の課題である。また、入学直後の生徒の状況を確認する調査として、附属高校が行っている「新入生へのアンケート」を活用していくことも検討の余地があると考えている。

【キャリア・ガイダンス】

◇附属高校生向けキャリア・ガイダンスに関するアンケート

高校生が大学の学科等に出向き、大学で何をどのように学び、それが将来のどのような進路につながるかといった説明を受ける「キャリア・ガイダンス」を実施している。2008年度は12月17日に行った。1年生は全員が、2年生は希望者が参加している。

実施直後にアンケート調査を行い、かつ感想文を書いてもらった。アンケート調査は、ガイダンスの内容が理解できたか、興味があるか、満足したか、役に立ったかについて、それぞれ5段階でその程度を質問したもので、無回答がやや多かったものの、いずれの項目についても、回答者の9割以上がプラスの評価をした。感想文には、大学の研究室や実験室を直接見て、そこで大学の教員から直接学問の話聞く体験ができたことを率直に喜ぶような記述が多かった。1年生の12月の段階なので、将来の進路やそれに結びつく大学の学部・学科をまだ深く考えていない生徒が多く、漠然とした興味関心で臨み、それゆえに見たり聞いたりしたことが新鮮であったものと思われるが、一方で、自分で調べ事前にかかなりの知識を持って臨んだ生徒もいた。来年度は、生徒が答えやすいように調査用紙を改訂する予定である。

◇校長による個別進路相談に関するアンケート

附属高等学校の生徒や保護者が大学教員である校長から大学について具体的な話を聞く機会として、校長による個別進路相談を1学期と2学期に行っている。2008年度も、柴眞理子校長による個別進路相談を実施し、38名の生徒が面談を受けた。事後のアンケートによると、生徒、保護者ともに好評であった。特に、大学が求める人材、大学が考えていることを、大学教員から直接聞いたことが高く評価された。また、事前に相談内容を伝えることになっているため、面談時には、一般論にとどまらず、個々の進路希望や不安に応じて、実際的かつ内容の濃い面談が行われた点も評価された。

【公開授業】

2008年度も、例年通り、附属高校生向けに大学の授業が公開された。前期には、延べ20名の生徒が、「数の歴史」「人間と発達」「日本古典文学史論（上代）」「中国語初歩Ⅰ」など13の授業を受講した。前期の終わりに、受講者及び授業担当者に対してアンケート調査を行った。受講した生徒は、おおむね積極的に受講し、授業内容を理解し、その学問分野への興味関心が高まったと自己評価しており、受講料や情報伝達等のシステムに対しても高く評価している。また、受講後の感想として、83%の生徒が「大学の雰囲気や大学生活の様子かわ

かった」を選び、33%の生徒が「高度で専門的な学習や実習ができてよかった」を選んだ。「進学先の一つとしてお茶の水女子大学を考えるようになった」と答えた者は22%であった。

また、アンケートに回答した10名の授業担当者全員が、高校生の受講態度を「良い」、「まあ良い」と評価し、理解度についても「理解している」、「まあ理解している」と評価した。しかし、古文の読解などで一般学生と比べて理解の不足している点を指摘し、対象科目を定期的に再検討すべきではないかと提案する回答もあった。

【教養基礎】

◇教養基礎 態度に関する調査

教養基礎科目として、1年次に「国語」Ⅰ、「数学」Ⅰ、「英語」Ⅰを、2年次に「国語」Ⅱ、「数学」Ⅱ、「英語」Ⅱを全員が履修することとしている。3年次には「古典読書」A、「古典読書」B、「数学」Ⅲ、「英語」Ⅲが開講されるが、これらは選択科目としている。

教養基礎プログラムでは、その教科、科目、分野への興味関心を喚起し、学習意欲を高め、自発的な学習行動を促すことを重視している。そのため、必修、選択を問わず開講している全ての科目において、生徒の学習態度に関する調査を実施している。

2007年度末の調査結果を検討した結果、国語は例年通り生徒の学習意欲を喚起していることが確かめられたが、時代の流れに沿って授業が進んでいることを生徒により意識化させるため、2008年度の調査から質問紙を改めることとなった。教養基礎「英語」Ⅱにおいて、2006年度の調査結果を踏まえて、2007年度後半にお茶の水女子大学のシェーファー教授による授業を行ったところ、非常に好評であり、英語の学習意欲向上に結び付いていることが確かめられた。また、教養基礎「数学」Ⅰ及びⅡにおいても、感覚的にとらえられるよう実験等の時間を増やしたところ、「実際に習った関数などが実生活の中でどう使われているかがわかり面白かった」等の意見が増え、授業に対する否定的な評価が著しく減少した。

こうした2007年度末に実施した調査結果を踏まえ、2008年度の後半は計画通りの授業を行う方針が確認された。また、2009年度もこれまでの方向性を維持しつつ、図書や学習に必要なハード面の充実をも図っていくこととなった。

◇教養基礎 学力に関する調査

教養基礎プログラムの成果を測る調査として、学力調査も行っている。学力調査は、それぞれの教科が学年末に行っている。国語はレポートを作成させ、数学は独自の学力テストを行い、英語はベネッセの英語コミュニケーション能力テストを利用している。これに加えて、

1年次7月、1月、2年次1月のベネッセ進研模試も学力調査として利用している。

また、今年度は浅見道明教諭が1年生全員を対象とし、Penny Ur(1984)の例文を利用して、カナダ人ALTが録音して作成したDICTATION TESTと、TOEIC BRIDGE練習テストのリスニング問題30問を使って教養基礎授業による生徒のリスニング力の伸びを調査した。DICTATION TESTは、では、Pretestの平均値が6.9426であったのに対し、Post Testの平均値は7.9344となり、1%水準で有意差が見られた。また、TOEIC BRIDGEを利用した調査においても、Pretestの平均値が24.7459、Post Testの平均値が25.7869となり、やはり1%水準で有意差が見られた。

【選択基礎】

2008年度は文教育学部比較歴史学・日本語日本文学・社会学・音楽表現コース各1名、理学部化学科2名、生物学科1名、計7名の生徒が選択基礎を受講している。例年通り、受講者を受け入れている学科等に対して、7月、11月、1月にアンケート調査を行っている。アンケートの内容は、それぞれの学科等で実施されている選択基礎の具体的な内容、指導状況に加えて、受講者の理解度や興味関心の高まりに関するものである。受講者の理解度や興味関心の高まりについては、理学部の選択基礎受講者らについて、分野によりばらつきがあるとの評価が見られた。また、7月の調査で、学科等からの指摘を受けて選択基礎受講の継続の可否を検討したケースもあったが、受講を継続することになった。11月の調査では、全ての受講者について大きな問題はないと判断され、7名全員が特別推薦入試を受験し、合格した。

また、受講者に対しては、2月にアンケートを行った。受講者は、高校では学べない内容、より専門的な内容を学びたいとの動機から受講し、選択基礎の授業内容が時折難しいと感じているものの、選択基礎の授業には全員が満足し、その分野に対する興味関心が高まっていることがわかった。また、受け身の学習姿勢ではなく、積極的、自発的な学習が大切であると答えている生徒も多かった。

【大学入学者についての追跡調査】

高大連携の第1期生8名が2008年度に大学に入学した。大学での学習および生活の状況についても本センターが追跡調査を行うことになっている。今年度は前期の成績を確認した程度で、来年度以降、面接等を実施しつつ学生の成長を記録していく予定である。